

国際総合学類4年生（2022年2月現在）の高木彩さんと松島准教授との  
周産期うつと援助要請の実態把握と属性を分析した共同論文が、  
日本周産期メンタルヘルス学会会誌（2021年9月）に掲載されました。

この論文は高木さんの国際総合学類のゼミでの研究および3年次の独立論文を進展させたものであり、4年次の9月に日本周産期メンタルヘルス学会会誌に掲載されました。

論文の目的は、周産期の女性が自身の精神的問題に関して行う援助要請の現状を明らかにし、専門家、インフォーマルネットワークへの援助要請および外部援助要請なしのそれぞれについて、妊産褥婦の抑うつ傾向や社会経済属性、ソーシャルサポート等との関連を確認することであり、分析には、オンライン調査による妊娠3か月から産後1年以内の妊産褥婦1181名のデータを用いました。現場の専門職が、周産期女性の健やかな暮らしを願っているにも関わらず、サポートが必要な女性にサービスが届かない（援助要請がない）という悩みを抱えています。誰が援助要請をしないのか、そしてそれはなぜなのかを定量的に明らかにして論じている研究はこれまでありませんでした。本論文は、日本全国を対象として行った調査を用い、まずは援助要請の実態を把握したこと、その属性を明らかにしたことで、特に実務に貢献する論文として評価を得て、産婦人科医、助産師、保健師が主な会員である学術誌に掲載されました。

